

国土学事始め



大石久和

京都大学大学院
特命教授

「交流の場としての道」復活こそ

京都で7月に行われる祇園祭は日本三大祭りの一つでもあり、5月の葵祭・10月の時代祭と並ぶ京都三大祭りのなかでも最大の祭りと言っても過言ではありません。東日本大震災に際して、過去の先例も町衆による山鉾巡行で

京都で7月に行われる祇園祭は日本三大祭りの一つでもあり、5月の葵祭・10月の時代祭と並ぶ京都三大祭りのなかでも最大の祭りと言っても過言ではありません。東日本大震災に際して、過去の先例も町衆による山鉾巡行で

いきましたから、平安時代に相次いだ自然災害による多くの死を鎮める意味もあったのかも知れません。一連の祇園祭の催しのなかで、圧倒的な存在を示すものはなんといい

一つの町内を構成するようになりました。これは、通り(道路)が地域のコミュニティ形成機能を持っていたことを示しています。お向かい同士が朝晩挨拶を交わすなどして

あり、向かい側は一つの町内ではなかったのに、時代とともに「みんなで大金を出し合って鉾を作って祭りに参加しよう」というほどの一体感が生まれつつあります。この高価な山鉾は、今も京の両側町の町衆の負担によって整備

大地震として平安時代の貞観地震がよく引用されましたが、この貞観年間(859年〜876年)から続いていると言われています。

す。豪華絢爛たる山鉾が市内をめぐめる様は「動く美術館」とも称されています。

この「両側町」といいますが、なきなたぼこ長刀鉾も月鉾もすべての山鉾は両側町の町衆のものなのです。もともと都ができたときには隣組が町内で

昔は祇園御霊会と言われて

さんで向かい合うエリアが

月を経るうちに、「通りをは

できたときには隣組が町内で

と感じています。

・管理されています。

ヨーロッパのように都市に広場を持たなかったわれわれは、道を交流の場として使ったのでした。道が持つこの機能——人と人を結びつけ地域社会をつくる機能を現代に復活させることが今こそ必要だと感じています。